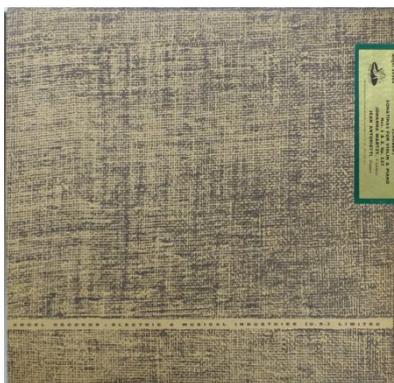
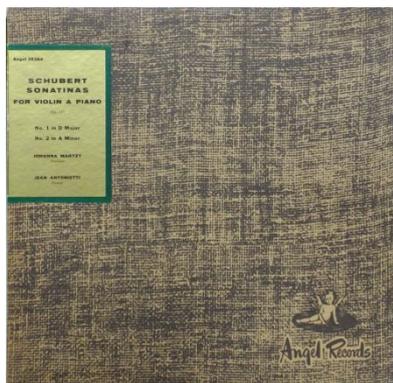


＜今週のお宝盤＞

受付期限：2026年4月8日

第9101番 マルツィのシューベルト



税込55000円

米エンジェル／35364／1955年録音／モノラル／イギリス・プレス／G

シューベルト ソナティネ第1、2番 マルツィ (vn) /アントニエッティ (p)

レコード・コレクターは多くのヴィルトゥオーゾを探し求め、聴いて満足感を得るが、マルツィは決して技巧派とは言えない。丁寧な弓捌きから生まれてくる音はいつでも心地よく耳に馴染む。これは31歳の録音だが、若さに任せた華やかさとは無縁であり、かといって十分に楽器を鳴らし、作品に相応しい音楽を聴かせてくれる。さて、この演奏は1949年にアムステルダムでの初共演から始まった9歳年長のアントニエッティとのものだが、ピアノの表現の幅はヴァイオリンよりやや大きい。だが、マルツィは終始自分の音を守っている。例えば第2ソナティネの第1楽章では抑えの効いた振幅の幅は決して過度になることなく、たとえピアノにかき消されそうになっても自分の表現を守っている。これは中々出来ることではない。だが、このレコードを聴く人はひたすらマルツィの音を追い続けるはずだ。どんなかすかな音でも、マルツィの音を肯定して耳を傾けるだろう。その意味で、最後まで自分の音を守り抜く若い天才アーティストの姿がありのままに伝わってくる貴重な体験を私たちは経験できるのだ。このレコードは入手激難の英33CXのアメリカ発売である。(山田)

第9102番 ミュンシュ&ボストン響のフランス音楽



税込22000円

米RCA／LSC2111／1956年録音／ステレオ／G

ドビュッシー：海 イベール：寄港地 ボストン響／ミュンシュ

ボストン交響楽団の定期会員だった知人は今でもミュンシュ時代を懐かしむ。偉大なのは、彼はフランスとドイツ音楽の両刀使いだったことである。その後もボストン響がアメリカ人のフランス音楽演奏オーケストラとして認められているのはミュンシュの手柄である。よく言われるがアルザスの血がミュンシュの音楽を創っているということ。それは間違いがない。アルザス人は頑固とか剛毅だとか言われる。歴史的にある時はドイツ領ある時はフランス領を繰り返したのだから仕方がない。さて、『海』は印象派の代表作と言われるが、トスカニーニとかミュンシュの演奏には砕ける波や水面の輝き以上に、刻一刻と変化する海の様子に力強い命が感じられる。例えば低音部の線の太さとか、ソロ楽器のはっきりした造形などには、“移ろい行く大海原の姿”など感じられない。むしろ、大自然への畏敬が繰り返し感じられる。そこがこの作品の偉大さであり、それを発見させてくれたミュンシュへの感謝である。高齢のミュンシュがバリ管を振った名盤「ブラームス第1交響曲」を思い出して欲しい。あの演奏の底辺には紛れもない北ドイツの重厚さが漂っていた。名指揮者は25年経っても表現力に大きな差異はない。ブラームスと違うのは一点だけ、『海』は描写音楽であるということ。微弱音から壮大な広がりまで、手塩にかけて育て上げた名奏者たちが繰り広げた歴史的演奏がこれだろう。(山田)